

平成 21 年度

# 佐和山城遺跡 現地説明会資料

滋賀県彦根市佐和山町

地元対象 平成 21 年 7 月 25 日(土)

一般対象 平成 21 年 7 月 26 日(日)

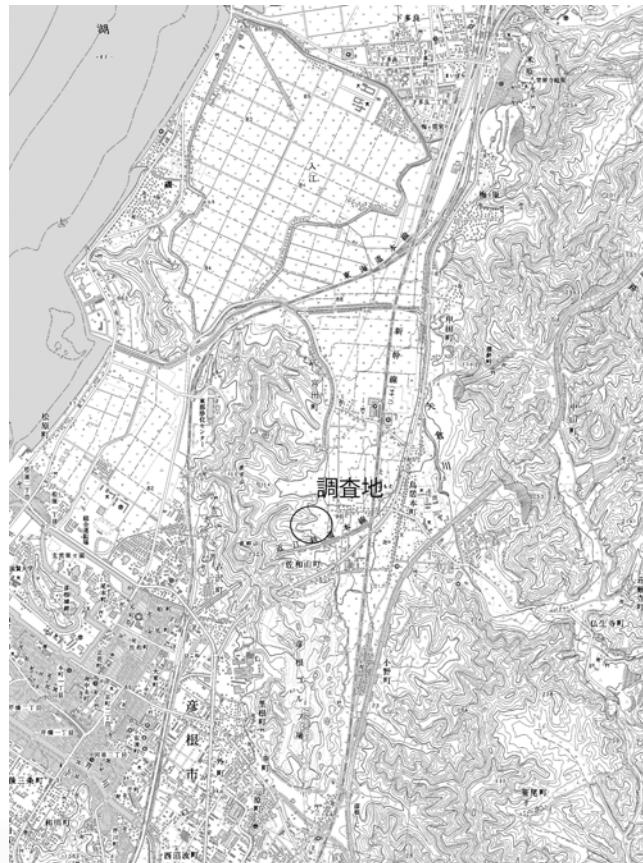


図 1 佐和山城遺跡の位置図 0 1km



大手口から本丸を望む

調査主体 滋賀県教育委員会

調査機関 (財) 滋賀県文化財保護協会

協力 彦根市教育委員会

## 1. はじめに

滋賀県農政水産部からの依頼により、滋賀県教育委員会が調査主体、(財)滋賀県文化財保護協会が調査機関となって、県営中山間地域総合整備事業(鳥居本西部地区)に伴う佐和山城(さわやまじょう)遺跡(彦根市佐和山町)の発掘調査を平成21年4月から実施しています。

今回、はじめて佐和山城に関連する本格的な発掘調査を実施し、浅井氏と六角氏の抗争の時代(16世紀中頃)と石田三成が在城した時代(1590~1600年)を中心とした武家屋敷の景観を復元する上で貴重な成果を挙げる事ができました。

## 2. 佐和山城遺跡の概要

### (1) 佐和山城の位置と歴史

佐和山は、彦根市の北東部、標高約233mをはかる独立丘陵で、北に入江内湖、西に松原内湖に接し、琵琶湖につながっています。東側には下街道(朝鮮人街道)と中世東海道(後の中山道)が通る陸の要衝でもあり、北に朝妻湊、西に松原湊を控え湖上交通の要衝の地でもありました。また、この地は犬上郡と坂田郡の郡境にあたり、言い換えれば湖東(江南)と湖北(江北)の境目にあたります。

城の築造時期は、鎌倉時代の初め、佐々木氏が館を構えたのが始まりと伝えられています。その後、佐々木氏は六角氏と京極氏に別れて対立、戦国時代には六角氏と浅井氏が近江の霸権をかけて、この地域を軍事的拠点として位置付け、争奪戦を繰り広げました。

元亀元年(1570年)当時、浅井氏家臣磯野貞昌(いそのかずまさ)が城主を務めていましたが、織田信長がこれを攻めて、元亀2年からはその家臣丹羽長秀(にわながひで)が城主となりました。また、豊臣政権においても佐和山城は、地域支配の拠点としての役割も担い、堀秀政や堀尾吉晴が城主となっています。特に、秀吉の重臣石田三成が城主となると、領内から夫役を徴発して修築し、その長い歴史のなかで最大規模の城に修築したと言われています。

慶長5年(1600年)の関ヶ原合戦で三成が敗れると、佐和山城は三日後に落城し、徳川家康の命により井伊直政が新しく城主になります。そして、直政没後の慶長9年から彦根山に彦根城の築城がはじまるときと佐和山城は廃城を迎えるのです。…(資料1の年表参照)

### (2) 佐和山城の構造

江戸時代後期に描かれた『佐和山城絵図』(文政11年)や現在に残る遺構から城の構造を考えると、佐和山城は山頂の本丸を中心に各尾根上に法華丸、太鼓丸、二の丸、三の丸、西の丸を配し、土壘や尾根を断ち切るための堀切(ほりきり)が各所に設けられていることがわかります。石垣は石田三成段階に構築されたと考えられますが、彦根築城の際に、ほとんどの石材を持ち去ったため、本丸・二の丸・太鼓丸の一部にしか残っておらず、全体像はよくわかっていない。山下には東側の中山道に面して大手土壘が残り、その中央に大手土壘が残り、その中央の虎口(こぐち)に大手門があったと推定されます。

今回調査した谷地形にも、東側を塞ぐように土壘が設けられていますが、現在その高まりは後世の削平により失われ、畑や畦として痕跡を残すのみとなっています。また、その東側(外側)には小野川が流れ、これは内堀の跡を示すものと考えられています。

### (3) 調査の経緯

今回の発掘調査は、遺跡がほ場整備事業により影響を受ける部分を約2,281m<sup>2</sup>を対象としています。大手土壘の北、近江鉄道の線路を挟んだ北側の「奥ノ谷」と呼ばれる谷筋にあたり、切土・排水路予定部分715m<sup>2</sup>の第1調査区と排水路部分1,566m<sup>2</sup>の第2

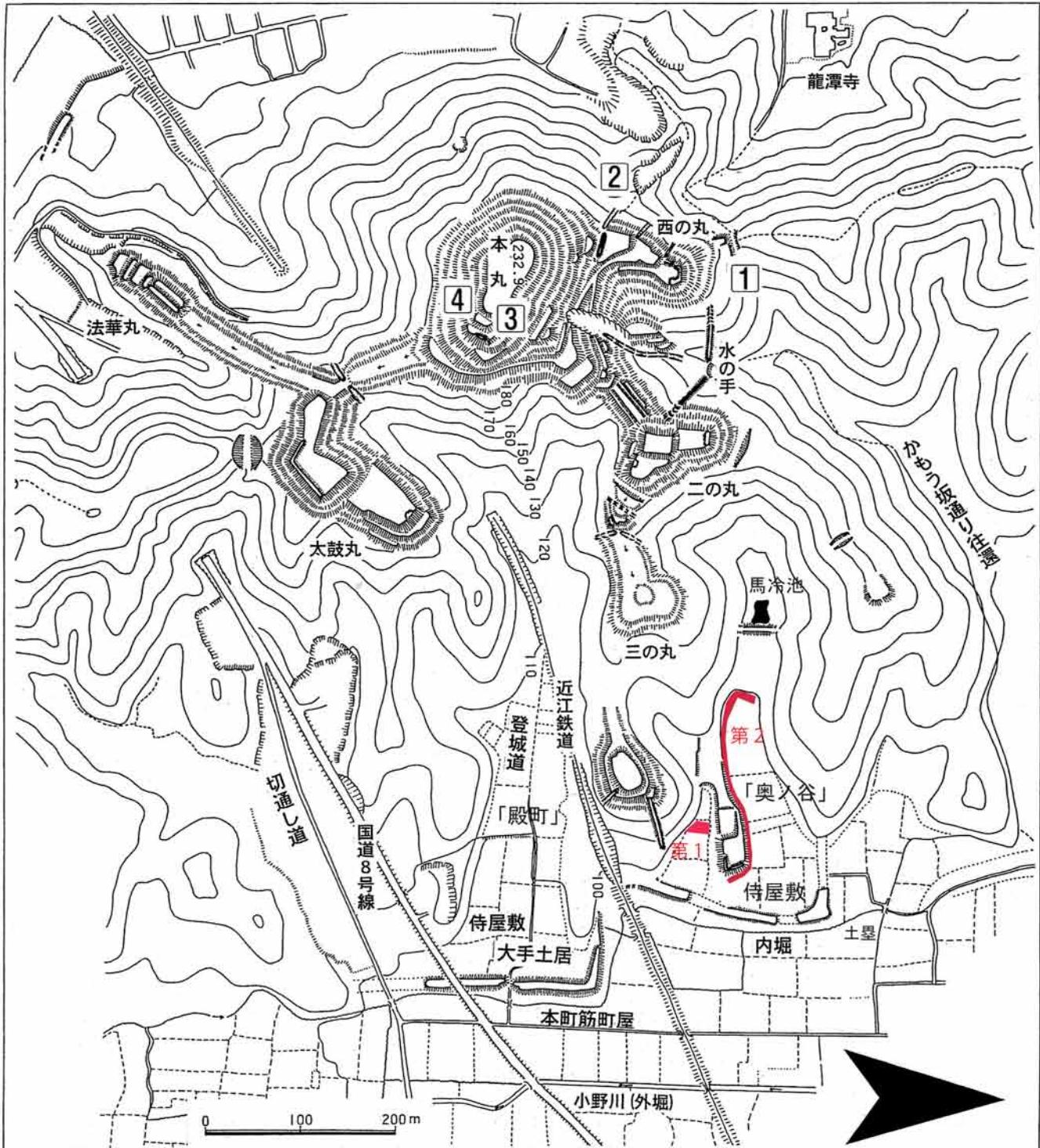


図2 佐和山城の遺構概要図と調査区 (■ 今回の調査区)

彦根市教育委員会文化財課作成「佐和山城跡解説シート」に加筆



第2調査区の調査前の状況



土塁の現況



図3 佐和山城遺跡遺構図  
(S=1/1,000)

調査区に分けて調査を実施しました。いずれも東側を土壘に塞がれた谷地形を形成しています。なお、今回の調査区は『佐和山城絵図』によると「侍屋敷」と記述のある地点にあたります。

## 2. 発掘調査の成果

### (1) 主な遺構

#### 第1調査区

16世紀中頃の掘立柱の柱穴、土坑、溝などを確認しました。柱穴と溝の状況からこれらの遺構は何度か造り直されているようです。屋敷地は南北方向を尾根に、西側を山に、東側を土壘に囲まれ、さらに、溝で区画されていたと考えられます。



#### 第2調査区

排水路計画部分の調査のため、平面的な広がりはよくわかりませんが、石組遺構、屋敷地を囲う溝と堀、門柱と橋状遺構を確認しました。なお、石組遺構の周辺で掘立柱の柱材を確認しています。

#### \* 石組遺構と溝 1



第2調査区の石組遺構

谷筋の中央で、大型の石を東西方向に組み、東辺のみ南北方向に直角に大型の石5石を並べた石列が確認されました。東西方向の石列の間にはこぶし大のレキが詰められていました。南北方向の5石の石組遺構に平行して幅0.4前後m、深さ0.2m前後の溝が設けられています。その南端は直角に東側に屈曲し、約12mで北側に屈曲しています。この溝内からは、土



第2調査区の堀1(南西コーナー)

器類の他に鉄砲弾、曲物や漆器椀などの木製品が出土しました。

また、この西側で直径約1mの円形にこぶし大のレキを敷き詰めた遺構が2箇所確認できました。なお、この石の上からは漆器椀や板状の木製品、銅錢が出土しました。

#### \* 堀

南側の山裾に沿って幅2~3mの堀1・2を確認しました。堀1は、東・西端で北側に屈曲し、約20~30mの単位で北側への堀が設けられていることから、この単位が屋敷地の区画を示していると考えられます。堀の底は、山側が深く、内側(屋敷側)が一段浅くなっていますが、後世の削平のため、深さは深い所でも0.5m、浅い所



第2調査区の堀2

は0.15m程度しか残っていませんでした。基本層位は、上層に砂レキ、下層に灰色粘質土が堆積しています。

堀2は、堀1の東端から約12mの間隔をおいて堀1と同じように区画を形成していますが、基本的に小野川沿いに残る土塁からほぼ直線的に西側に向かって伸びています。底部は、比較的平坦に掘削されています。

#### \* 門柱と橋状遺構

堀1の西から2つ目の区画内に、直径約0.5mの柱穴が2箇所検出され、その柱穴内には直径約0.2mの柱が残っていました。2本の柱間は、2.1mを測ります。この2本の柱と平行に堀1内には、外側寄りに直径5~6cmの杭が一列に打ち込まれ、一部に石がはめ込まれています。杭列の幅と柱間がほぼ同じで、この杭列は、堀1を渡るための橋の床板を支える杭ではないかと考えられます。そして、2本の柱は堀を渡って屋敷地の入口に建てられた門柱的なものと想定しています。



堀1に架かる橋状遺構と門柱

なお、この遺構の両側の堀内からは、瀬戸焼の茶碗、備前焼の擂鉢、曲物などが出土しています。

#### (2) 主な遺物

第2調査区の溝や堀から土器類の他に桐文銅製紐金具(きりもんどうせいひもかなぐ)・銅錢・鉄砲弾などの金属製品、下駄(げた)・漆器椀・箸(はし)・曲物(まげもの)などの木製品、砥石・石臼などの石製品、瓦が出土しています。主な遺物を紹介します。

#### \* 土器類

土師質皿、信楽焼や備前焼の擂鉢、瀬戸美濃焼の天目茶碗、瀬戸焼の茶碗、青磁碗など

が出土しました。

#### \* 桐文銅製紐金具

山裾を巡る堀 2 から銅製の紐金具が出土しました。銅板を五三桐(ごさんのかり)にかたどり、花や葉を蹴彫(けりぼり)で表現しています。さらに、葉は葉脈の部分が無地ですが、その間を魚々子(ななこ)で表現しています。表面に着色などの痕跡は観察できませんが、本来、鍍金などが施されていた可能性があります。左右の花と左側の葉が欠損していますが、縦 5cm、横残存 3.7cm、厚さ 0.15cm をはかり、中央に一辺 0.6cm の方形の孔が穿たれています。

\* 銅錢 溝 S1 と円形の石敷遺構から銅錢が 1 点ずつ出土しました。前者の文字は判読できませんが、後者は「洪武通寶」と読める明錢で、初鑄年は 1368 年です。

\* 鉄砲弾 第 1 調査区の溝と第 2 調査区の溝 S1 から鉛の鉄砲弾が 1 点ずつ出土しました。

\* 下駄 台と歯を一本で作った連歎下駄と台と歯を別々に作り組み合せた差歎下駄があり、主に溝 1 から出土しました。

\* 漆器椀 口クロ挽き成形した割り物で、内外面に黒漆が塗られています。

\* 曲物 檜や杉などの薄く削りとった材を円形に曲げ、合せ目を樋や桜の皮で綴じて作った容器で、身・側板・底板の遊離したものが多く、底板が数枚、側板を伴ったものが 2 点出土しました。

\* 瓦 溝 1 や堀から中世末から近世に位置づけられる平瓦、丸瓦が 10 点程度出土しました。

### 3. 調査成果から窺える佐和山城

#### (1) 桐文銅製紐金具の意義付け

中世の経箱や手箱(てばこ)の多くは、蓋を閉じて紐(ひも)を掛けるもので、身の長側面の中央に紐を固定する紐金具を取り付けています。今回出土した金具は、この紐金具に相当します。技法的には、蹴彫は細くて浅く、魚々子も小粒で浅いのが特徴で、桐の文様の花と葉がバランス良く表現されています。これは桃山時代の金具類にみられる特徴で、土器類から判断している 16 世紀後半という遺構の時期とも合致しています(京都国立博物館 久保智康氏のご教示による)。

桐文の紐金具の類似品としては、和歌山県熊野速玉大社(くまのはやたまたいしゃ)の古神宝の手箱(化粧箱、1390 年)の紐金具があります。また、桐文を施した金具は、滋賀県安土城跡の伝台所跡から出土した唐櫃(からひつ)の飾金具があり、桐文の外側に魚々子が施されています。和歌山県紀の川市重行(しげき)遺跡では、中世の包含層から五三桐文が印刻された飾金具(鍍金)が出土しています。

古くから「菊紋」は皇室の紋として幕府や民衆に広く認識され、「桐紋」の五七桐(ごひちのかり)は「菊紋」の替紋として使用されました。天皇より任命された統治者たちは功績のあった家来たちに「桐紋」を贈与することも行ったようで、その権威は強いものとなり、豊臣秀吉は「菊紋」や「桐紋」の無断使用を禁止することも行っています。

今回の桐文銅製紐金具が出土したことは、この金具が取り付けられた手箱を使用できた家臣の身分の高さを想定することができます。「桐紋」を好んで用いた秀吉が家臣である三成にもその使用を許し、さらにその家臣もそれに追随して使用を許されたとも考えられます。

一方で、桐文は中世の金具類のモチーフとして比較的多く用いられており、断定するこ

とはできませんが、熊野速玉大社の手箱のように神をかざるにふさわしい意匠として用いられたと考えてよいでしょう。

## (2) 石田三成の時代の佐和山城

「三成に過ぎたるもの二つあり、島の左近と佐和山の城」。後世になって、このように形容された佐和山城は、慶長5年(1600年)天下分け目の関ヶ原合戦で西軍を率いた石田三成の居城として全国的に有名です。今回の調査は排水路部分の限られた調査ではありますが、初めて考古学のメスが入ったことになり、石田三成時代における山下の武家屋敷の一端が明らかになりました。

南側の山裾に沿った堀は、土壘に塞がれた谷筋に形成された屋敷地の区画を示していると考えられます。図3に示されるように、山裾に沿った堀は東西方向に20~30mを一つの単位として区画を形成しながら掘削されており、これが屋敷地の単位ではないかと考えています。また、屋敷地への進入路ですが、谷幅が狭いため、中央ではなく北側の山裾沿いに設けられていたのではないかと推定されます。

この屋敷地は谷地形のため、現在も山上からの流水が多く、土も粘土質のため非常に水はけが悪いことから、常に水が滞水しますので、十分な排水施設が必要となります。また、屋敷地が築かれる以前は湿地帯であった地点もあったよう(腐植土の堆積が確認される)で、石組遺構が確認された地点は整地されていたことがわかりました。つまり、堀は排水施設としても機能し、石組遺構はこの流水を集め、浄化して流すような施設ではないかと想定しています。

また、堀1で確認された橋状遺構の山側の尾根上には三の丸が位置し、この橋状遺構の延長線上に三の丸に繋がる道を想定できます。屋敷地から門をくぐり、堀を渡って三の丸に至るルートです。詳細は今後の調査を待つことになります。

第2調査区で出土した遺物は、16世紀後半を中心とした時期のものです。史実によると天正13年(1585年)に堀尾吉晴が入城しますが、天正18年(1590年)以降は城番を置いたようで、城は機能せずかなり荒廃していました。三成が城主となると再び戦略拠点として城の修築を命じ、これまでにない大規模な整備を行ったと伝えられています。今回確認できた堀で区画された屋敷地は、正にこの時期に整備された屋敷地と考えることができ、三成段階において佐和山城の大手が機能していたことがわかりました。

以上のように、今回の調査は『佐和山城絵図』に記された「侍屋敷」の実在を示すと共に、これまでわからなかった佐和山城の実態を明らかにし、かつ良好な状態で地下保存されていることを明らかにしたはじめての発掘調査の成果として貴重です。

最後になりましたが、発掘調査が円滑に進められ、こうした重要な成果が得られたことは、ひとえに地元の皆様や関係者の方々のご理解、ご協力の賜と感謝いたしております。厚くお礼申し上げます。

### 《用語の解説》

**佐和山城絵図(さわやまじょうえず)**…井伊家伝来の佐和山城絵図3枚が彦根城博物館に所蔵されています。内1枚には文政11年(1828年)の墨書き記されています。

**蹴影(けりぼり)**…先が直線状の鑿(たがね)を素地に打ち込んで、その楔形(くさびがた)の打痕を連続させて線状に表現する技法です。

**魚々子(ななこ)**…刃先は円状の魚々子鑿を使って、連続する細かな円形の鑿痕を素地に打ち込んでいく技法です。

## 資料1

## 佐和山城の歴史

主なできごと

城代・城主

西暦(年) (鎌倉時代)	年号(年)	
1532～1555	天文年間	近江守護職佐々木定綱の六男、佐保六郎時綱が佐和山に砦を築く
1538	天文7	六角氏の勢力が佐和山城付近まで伸張
1552	天文21	京極高慶が浅井亮政に対抗するため、六角定頼の援軍を仰ぐ 浅井方の佐和山城、鎌刃城を落城させる
1559	永禄2	京極高広、佐和山城を攻撃
1561	永禄4	浅井長政、家臣百々内蔵介に佐和山城城代を命じる 六角義賢、佐和山城を攻撃
1570	元亀元	浅井長政、佐和山城を奪い返し、磯野員昌を城主とする
1571	元亀2	磯野員昌、周囲に4つの付城(砦)を築き、孤立させる
1573	元亀4	無血開城し、丹羽長秀が入城する
1576	天正4	信長、佐和山城に立ち寄り丹羽長秀に大船の建造を命ずる
1582	天正10	信長、安土城完成まで居城
1585	天正13	清州会議を経て、堀秀政が入城
1590	天正18	堀尾吉晴が入城…豊臣秀次による近江支配
1600	慶長5	石田三成が入城 関ヶ原の戦いの後、父石田正継、兄正澄が抗戦するも落城
1604	慶長9	井伊直政が入城 井伊直継、彦根城の築城開始（その後、佐和山城廃城）